刺客列伝

자객열전 Terrorists

作＝**朴祥鉉**（박상현／パク・サンヒョン）

訳＝**木村典子**（きむら・のりこ）

2006年　劇団グリーンピッグ（大学路ウリ劇場）より

初演：2003年にワークショップで発表
翻訳底本：2005年上演台本

『刺客列伝』作者

朴祥鉉（パク・サンヒョン）

一九六一年ソウル生まれ。西江大学新聞放送学科に入学し、西江演劇会で活動。卒業後、大宇電子にコピーライターとして入社し、二年で退社。作家を目指し執筆活動に専念する。十五歳から新春文芸に小説と詩を応募していたが、三十歳の時、最後と思って出した戯曲『四〇五号のおばさんは実に善良だ』も落選。その後、東崇アートセンター、映画社などを転々とし、九二年に尹政善「夕暮」を脚色・演出し演劇界デビュー。『最後の手ぶり』『青い墓の息遣い』などを演出後、一九九八年、『四千日の夜』を作・演出し、作家デビューをはたす。二〇〇〇年～〇二年、オハイオ州マイアミ大学院で演劇を専攻。〇四年、『刺客列伝』で金相烈演劇賞、『四〇五号のおばさんは実に善良だ』で大山文学賞戯曲部門を受賞。一〇年には代表作『刺客列伝』『サイコパス』など五作品を収めた「朴祥鉉戯曲集」（チアン出版社）を上梓。現在、韓国芸術総合学校演劇院劇作科教授。

『刺客列伝』翻訳者

木村典子（きむら・のりこ）

一九六三年、北海道旭川市生まれ。一九九七年に渡韓し、延世大学韓国語学堂で韓国語を学ぶ。卒業後、セゾン文化財団の助成を受け、劇団木花（呉泰錫代表）で研修し、一九九九年より同劇団の制作者として活動。二〇〇六年からフリーランスとなり、日韓の舞台芸術交流のコーディネーター、通訳・翻訳、プロデューサーとして活動。二〇一四年に帰国し、現在、公益財団法人北海道演劇財団でプロデューサーとして勤務。帰国後も、北海道文化財団と光州演劇協会の交流事業、札幌劇場連絡会と韓国小劇場協会の劇場間交流などをサポートし、札幌を拠点に北海道と韓国をつなぐ活動をおこなっている。

刺客列伝

解説

『刺客列伝 Terrorists』（以下『刺客列伝』）は、大韓民国臨時政府主席を務めた金九（キム・ク）、そして、昭和天皇を狙った襲撃事件「桜田門事件」（昭和七年一月）で大逆罪に問われ死刑となった李奉昌（イ・ボンチャン）、上海の虹口公園で執り行われる大観兵式と天長節祝賀会を狙った爆弾テロ事件「上海天長節爆弾事件」（昭和七年四月）で軍法会議にかかり銃殺刑となった尹奉吉（ユン・ボンギル）の三人を軸に、中国の歴史書『史記』の「刺客列伝」に登場する曹沫（ソウカイ）、豫讓（ヨジョウ）、荊軻（ケイカ）、ロシア帝国の革命家ソフィア・ペロフスカヤ、リトアニアで生まれアメリカで活動したフェミニストのエマ・ゴールドマン、名もないチェチェンの女戦士など、古今東西のテロリストとテロ事件が語られていく。

劇作家・朴祥鉉（パク・サンヒョン）は、二〇〇〇年から二〇〇二年までアメリカのオハイオ州立マイアミ大学の大学院で演劇を学んだ。この留学中に起きたのが、アメリカ同時多発テロ事件だった。全世界にリアルタイムで伝えられたワールドトレードセンターのツインタワーが崩壊する映像は、私たちに大きな衝撃を与えたが、彼は大学の学生食堂で崩れゆくこのマンハッタンの超高層ビルの姿を見守っていたという。多くの人が「どうしてこんなことが起きたのか？」と自問したように、彼もまた自らに問わざるを得なかった。その答えを探し、多くの資料を集め、書かれたのが『刺客列伝』である。そして、ジョージ・W・ブッシュ大統領がイラクに侵攻した〇三年、ワークショップを通じて発表された。〇四年にはイ・ソンヨル演出で初演され、韓国演劇評論家協会の今年のベストスリーに選定されるとともに、朴祥鉉は第六回金相烈（キム・サンヨル）演劇賞を受賞した。翌〇五年には自ら演出を手掛け、ソウル国際公演芸術祭公式参加作として再演され、これを契機に演出家ユン・ハンソルと旗揚げした劇団グリーンビッグで〇六年にも再々演している。

朴祥鉉にとって『刺客列伝』は、自身と社会を切り結ぶ転換点となった作品でもある。彼の本格的な演劇活動のスタートは、劇団演友舞台（ヨンヨブデ）が公演した尹政善（ユン・ジョンソン）原作『夕暮』（九二年）の脚色・演出だった。メロドラマが演劇界デビューとなった彼は、「自分の素養も方向性もそっちにあるのだろう」と思っていたという。しかし、アメリカ同時多発テロ事件が、彼が世界と歴史に目を向ける契機となり、その知的模索とこれに合う劇の形式を探求した結果生まれた『刺客列伝』は、彼の創作の方向性と戯曲の形式を大きく変え、韓国演劇界における彼の立ち位置を決定づけた。

朴祥鉉の戯曲には大きな特徴がある。『刺客列伝』では語り手として現れる叙述的話者という存在だ。この話者は再現的な物語の一軸を担う人物でもあるが、観客に直接語っているようでありながら、発話は劇中の他の人物に向かい、また同時に内的独白にとどまる。これにより、発話の主体はあいまいになり、加害者／被害者の区分も明確ではなくなる。こうした形式から立ち上がる舞台は「同時代の韓国社会の自画像を描き出している」と評される。しかし、私には私たちが生きる複雑に入り組んだ世界の自画像に思える。

（木村典子）

登場人物

白凡・金九（キム・グ）　独立運動家・大韓民国臨時政府主席・政治家

李奉昌（イ・ボンチャン）　金九の指示により桜田門事件を起こした独立運動家

尹奉吉（ユン・ボンギル）　金九の指示により上海天長節爆弾事件で爆弾を投擲した独立運動家

王社長

張小姐（シャオチエ）

西洋人男性

西洋人女性

アラブ女性

登場人物たちによって、以下の人物たちが演じられる。
あるいは語り手によって語られる。

曹沫（ソウカイ）　魯の荘公に仕えた将軍
荘公（ソウコウ）　魯の君主
桓公（カンコウ）　斉の君主
管仲（カンチュウ）　斉の政治家
豫讓（ヨジョウ）　趙襄子を狙う刺客
趙襄子（チョウジョウシ）　晋の政治家
荊軻（ケイカ）　嬴政を狙う刺客
丹（タン）　燕の太子
樊於期（ハンオキ）　秦の将軍
嬴政（エイセイ）　秦の始皇帝
ハサン・サッバーフ　イスラム教ニザール派の開祖
アル・マズダガーニ　ダマスカスの宰相
アタベクのブーリ
エマ・ゴールドマン　リトアニア出身のアナキスト
アレクサンダー・バークマン　リトアニア出身のアナキズム指導者
ソーフィヤ・ペロフスカヤ　ロシア帝国のテロリスト
ゲーシャ・ゲルフマン　ユダヤ女性革命家
ニューヨークの老紳士
チェチェンの女戦士
天皇
日本国総理大臣
防衛庁長官
大様奉昌（オオサマブショウ）　など…

※　この戯曲に登場する歴史上の人物の行動は必ずしも史実と一致しない。

※　劇中の崔壽鳳（チェ・スボン）、金翊煥（キム・イクファン）、吳成崙（オ・ソンニュン）、李鍾巖（イ・ジョンアム）、金祉燮（キム・ジソプ）などの抗日行為は、若山（ヤウサン）・金元鳳（キム・ウォンボン）が率いた満州で組織された抗日武装独立運動団体「義烈團」の活動であり、すべて一九二〇年代に起きた事件である。金九と深い関係にはない。戯曲の構造上、義烈團の抗日行為を借用して部分的に加工したものであり、関係者ならびに観客の理解を賜りたい。

※　太字部分は、その大部分がひとりの人物によって語られるが、別の人物の声で語られることもある。

曹沫は魯の者だ。魯の君主・荘公は力のある者を好んだ。それゆえ曹沫は魯の将軍となり、斉と戦ったが、三度も敗戦し、逃げ出した。これに荘公は恐れおののき、遂邑の地を斉に献上して和議を図ったが、曹沫を将軍の職から解くことはなかった。斉の君主・桓公との盟約の席で、曹沫は匕首を手に握り締め、壇上に駆け上がると、桓公に突きつけた。周囲にいた人々は止めに入ることはなかった。「そなたの望みは何だ?」。桓公が尋ねた。これに曹沫は「斉は強く、魯は弱い。なのに、大国である斉の侵犯は度を越している。斉の国境は我が国の領土奥深くまで入り込み、すでに国都まで差し迫っている。君王におかれてはこのような現状を考慮していただきたい」と語った。桓公はこの話を聞き、結局魯から奪った土地をすべて返すことを約束した。すると、曹沫は匕首を投げ捨て、壇上から降りると、再び臣下の座に戻った。後日、桓公が約束を反故にしようとすると、宰相の管仲が進み出た。「なりません。小さな利益を貪り、自ら満足すれば、諸侯からの信望は地に落ち、天下諸国からの支持を失うこととなります。ゆえに約束通り、領土をお返し願います」。こうして、曹沫が三度の戦いで失った領土は、すべて魯のもとに返還された。

一九三一年十二月。
中国・上海、フランス租界のある食堂。

白凡・金九と李奉昌。

白凡　……相手を制圧する時は急所を責めるのが肝心だ。胸倉をつかんでもただ服をつかんでしまっては、相手に反撃の機会を与えてしまう。こうしてしっかりつかみ、のど元を締め上げるんだ。わかったか、奉昌。

李奉昌　はい、先生。

白凡　こっちに来てみろ、奉昌。

二人は膳をどけ、前に出てきて向き合う。

白凡　さあ、胸倉をつかめ。

李奉昌　恐れ多くも先生の……

白凡　ほう！

李奉昌、白凡の胸倉をつかむ。

白凡　しっかりつかめ、ぎゅっと。

李奉昌　ぎゅっと。

白凡、気合とともに李奉昌を背負い投げ、制する。

白凡　一度つかんだら、たとえ手首が折れようとも、放してはならん。君は虚弱でいかん。まずは滋養をとらねば。今日はたっぷり食べろ。

李奉昌　とんでもありません、先生。

白凡　ほう！

李奉昌　敵の首魁、民族の不倶戴天の敵、日本国天皇を成敗するために来たというのに、食欲を満たすなど、なぜできましょう。

白凡　この詩を知っているか？「風蕭蕭兮易水寒　壯士一去兮不復還【註1】」。風蕭々として易水寒し、壮士ひとたび去って復た還らず。二度と炸醤麺（ジャジャメン）も古老肉（スブタ）も味わうことはできんのだぞ。

李奉昌　これまで存分に味わいました。

白凡　なら、女でもどうだ？　金ならある。

李奉昌　いいえ。人生の目的が快楽なら、この三十年、この肉体で楽しめるだけの快楽を味合わさせていただきました。

白凡　（舌打ち）……ともあれ食す姿勢をみれば、壮士の気骨がわかるというものだ……（間）私が二十歳のころ、素手で日本の将校を討ち取ったことは知っているだろう？

白凡が二十歳の時、黄海道（ファンヘド）・安岳（アナク）の鴟河浦（チハポ）にある旅館で、朝鮮人を装った大日本帝国陸軍中尉・土田譲亮を見つけ、「国母を殺めた倭奴（ウェノム）を討つ」と、土田を殺す決心をする。

白凡　君、その時の私の気持ちがわかるか？

李奉昌　『白凡逸志』を読ませていただき、存じております。国母を殺めた倭奴を討つ！

白凡　では、君が私で、私が私の心だとしてみよう。

李奉昌　あいつは間違いなく日本人だ。国母を殺めた倭奴を討つ！

白凡　よく見ると、白い木綿の外套、トゥルマギの下に刀の鞘が見える。

李奉昌　だが、俺はひとり、それも素手だ。

白凡　下手に動けば、奴の刀にむなしく倒れることにならないか？　手を出せば、奴が倭奴だとも知らず、まわりの者たちが止めに入るのではないか？　そうこうしているうちに、奴の刀がすっと俺に突き刺さってきやしないか？

李奉昌　だめだ。別の機会を狙うしかない。

白凡　この時、ふと浮かんだわが師の言葉。「得樹攀技無足奇　懸崖撤手丈夫兒」。

李奉昌　どういう意味です？

白凡　枝をつかんで登るのは特別なことではない。断崖にぶら下がり手を離すことこそ立派な男子！

李奉昌　そうか！　貴様！

白凡　しかし万事、事を計る時は、機先を制さねばならん。折しも宿の主人が朝飯を持ってきた。俺は飯を平らげ、主人を呼んだ。「今日は七百里もの山道を行かねばならん。朝飯をもっと食ってから出かけよう。飯を七杯用意してくれ」。こういうと、主人は何と言ったと思う？

李奉昌　若いのになんと哀れな。気でもふれたようだな。（笑）

白凡　客たちが笑っていた。この隙を突いて、俺は「貴様！」と倭奴に襲い掛かり、一発で…！

白凡が李奉昌に襲い掛かり、顔を足蹴にして倒す。
刀を抜き、反撃する土田。
一騎打ちの末、白凡は刀を奪い、土田をめった刺しにする。

白凡　倭奴の体から血が噴き出し、庭へと流れた。俺はその血を鷲づかみにして飲み、顔に塗りつけた。

李奉昌　……あ、朝飯は……？

白凡　しばらくして、主人は言ったとおりにひとつの膳に七杯の飯、他の膳には総菜を山盛りにして持って来た。激しい運動をした後だから二杯は平らげたが、残りを食べ切る自信がなかった。そこで大きな金だらいを持って来させ、飯と総菜をすべてぶち込み、匙二本を重ね持ち、飯のかたまりをごっそりすくい、そして匙を下して、こう言った。「今日は敵の血をずいぶん飲ませてもらったせいか、飯がどうにも進まん！」（間）行こう。母上が大根菜っ葉の味噌汁を作ってくれると言っていた。

李奉昌　そのような貴重なものを……

白凡　『白凡逸志』がもう出版されたとは……

白凡と李奉昌、そっと食堂を抜け出す。

豫讓は晋の者として、かつて范氏と中行氏に仕えたが厚遇されることはなかった。彼らのもとを去った豫讓は智伯に仕えた。智伯は豫讓を尊び、寵愛した。智伯は宿敵の趙襄子を討とうとするが、趙襄子は韓氏と魏氏と共謀し、逆に智伯を返り討ち、彼の後裔を滅ぼし、領土を三つに分けた。また、智伯に遺恨をもつ趙襄子は、彼の髑髏に漆を塗り、これを便器として使った。豫讓が山に逃げ込み、ため息をつきながら言うには、「士爲知己者死　女爲悅己者容」。士は己を知る者のために死し、女は己を悅ぶ者のために容る……！　豫讓は智伯の仇を討つと誓う。

一九三一年十二月。
中国・上海のフランス租界のある食堂。
白凡が李奉昌を連れて入ってくる。
化粧をしていた若い女が立ち上がり、出迎える。

【註2】※1

張小姐　（中国語）ライライ！　アー、チン・シェンション！（來來！啊、金先生）

白凡　（中国語）ニイハオ、ジャン・シャオチエ。（你好、張小姐）

張小姐　（中国語）クワイライ、クワイライ。（快來　快來）

白凡　（中国語）チン・ゲイウォー・イーワン・チャーチャンミェン・フー・イーバ・チェンダオ。（請給我一椀炸醬麵和一把剪刀）

張小姐　（中国語）チェンダオ？　チェン・シェンマ？（剪刀？剪什麼？）

白凡　（中国語）チェン・シェンマ、アー、チェン・ミェン。（剪什麼　啊、剪麵）

張小姐　（中国語）ハオ、ハオ。（好　好）

張小姐が厨房に入っていく。

李奉昌　何を話していたんです？

白凡　今日は二人きりで折り入った話があるから客は取るな、高級料理をたっぷり用意してくれと言ったんだ。座れ、奉昌。

李奉昌　大根菜っ葉の味噌汁をいただければ十分なのに、わざわざこんな所で……

白凡　何も言うな。君を敵地に送り込むというのに、これくらいのこともさせてもらえんのか。「壯士一去兮不復還」、壯士ひとたび去って復た還らず。二度と古老肉も油淋鶏も食べられんだろう。

李奉昌　存分に食べました。

白凡　金ならある。あの娘はどうだ？

李奉昌　これから永遠の快楽を得に赴くというのに、一瞬の快楽を貪ってどうなるものでしょう。

白凡　しかし、送り出す者の思いとしてはそうはいかん。（間）崔壽鳳君を知っているな？

李奉昌　捕まった同志たちの仇を討つと聞き分けなく騒いでいた青年ですね。

白凡　そうだ。何年か前、蜜陽に運び込まれた爆弾が見つかり、国内にいる同志たちが捕まったことがあったろう。郭在驥　懲役八年、李成宇　懲役八年、尹小龍　懲役七年、金スドウク　懲役七年、黄尚奎　七年、李洛俊　七年、申喆休　懲役七年……壽鳳君が彼らの仇を討つから自分を送ってくれと一歩も引かんのだ。だから、「まだだめだ」「君は若いからいかん」と言ったら、こっそり爆弾を二個作って朝鮮に入国してしまった。

李奉昌　それでどうなりましたか？

白凡　壽鳳君が心を決めて蜜陽警察署に押し入ったのは朝九時ごろ。ちょうど署長室に全警官が集まって特別訓示を聞いているところだった。絶好の機会だった。その機会を逃さず、崔壽鳳青年は爆弾一発を署長室に向かって投げた。ガチャン、窓ガラスを割って飛んで行った爆弾は巡査部長の腕に当たり、床に落ちた。残念ながら不発だった。室内は一瞬にして修羅場と化し、奴らが犯人を捕まえようと部屋を飛び出そうとしたその瞬間、壽鳳君は二発目の爆弾を警察署の玄関に投げつけた。轟音とともに爆弾はさく裂し、玄関と窓ガラスが壊われた。壽鳳君は逃げた。しばらく走り続けた。走って、走って、走った。無我夢中で走った。わき目もふらず……走り続けた……走って、走って……

李奉昌　それで？

白凡　十里ほども走ったろうか。どのみち失敗したと思った壽鳳君は懐から短刀を取り出し、腹を切ろうとした。その時、警官たちが押し寄せ、短刀をひったくると手錠をかけたそうだ。

李奉昌　それで、奴らの被害は……？

白凡　爆弾が当たった巡査部長は、肘に怪我くらいはしたろう？

李奉昌　青あざくらいはできたでしょう。

白凡　そう思うか？

李奉昌　崔壽鳳君はどうなったんです？

白凡　一審で無期懲役の宣告を受けたが、控訴審では死刑。

李奉昌　長い年月、男盛りを刑務所で過ごすくらいなら、むしろ……

白凡　あの時、私が先にまともな爆弾を作ってやっていたなら……いや、あたたかなチャンポン一杯くらい食べさせて送り出してやっていたなら、こんなに胸が張り裂けそうになることも……！

李奉昌　大事を成した後も私が生きていたなら、すぐに極刑に処されますよね？

白凡　倭奴がそれほどお人好しだと？

李奉昌　どういうことです……？

白凡　すぐに刑を執行してくれれば心ある紳士だ。おそらく君を毎晩呼びつけるだろう。

李奉昌　夜更けに呼びつける……？

白凡　呼びつけては拷問するだろう。

李奉昌　それしきの拷問、耐えてみせます。

白凡　むち打ち、棒を使っての殴打、熱く焼かれた鉄を押し付け、電気責め、逆さ吊りにして鼻の穴に水を注ぎ、針で手足の爪の間を刺し、陰茎にロウソクの芯を挿し込み、角材三本を指の間に挟み両端を縛り上げ……これらに耐えられるか？耐えられるのか？

李奉昌　耐えられます。

白凡　耐えられるか？

李奉昌　（間）耐えられると思います。

白凡　拷問よりさらに人を狂わすのは飢えだ。

李奉昌　大の男が食い物に頭を下げますか？

白凡　誰かが扉の前で差し入れでも食べようものなら、監房にまで肉の匂い、キムチの匂いが立ち込め、気が狂いそうになる。女房がまだ若いその身を売ってでも、白い飯と上等な総菜を作って来てくれたらと思ったもんだ。死ぬほど殴られた後には、麦飯に醤油や味噌に漬けた野菜の切れ端でさえ、どうしてあれほど食べたくなるのか。すると、奴らはわざと牛肉の入った汁飯を持ってきて「食え」と言う。

一九一一年の正月、白凡はいわゆる「安岳事件」により拘束された。その後、京城（キョンソン）に押送され、連日残忍な拷問を受けていた。

白凡　いらん、こいつ！　しばらく耐えてみせる。

李奉昌　唾を飲み込む音がここまで聞こえるぞ。いいから食え。こうでしたか？

白凡　そうだ。だから私は言ってやった。お前が無罪と認めるなら食ってやるが、もし有罪と思うなら食うことはできんとな。

李奉昌　すでに有罪判決が出たではないか？

白凡　だから、誤判だと言っているんだ。

李奉昌　ははは、お前を始末するのが目的なら、こっそり消している。わざわざ誤判の裁判までやるものか。

白凡　たとえば、飯に毒を盛ったりしてな……

李奉昌　毒でも入れたんじゃないかとご心配なようだな。

白凡　だとしても、食って死ぬならそれまで。俺は臆病者じゃない。

李奉昌　本当に毒が入っているかもしれないと疑ってるんじゃないのか？

白凡　けちな疑いなんぞしていないことを証明するためにも、やむなく食うしかないようだな。

白凡は品よく、いそいそと食べ始め、李奉昌はその姿をじっと見ている。

李奉昌　先生、私のために爆弾を二発作ってください。ひとつは投擲用、もうひとつは自爆用です。

白凡　（間）君は、私が飯を食べたのでがっかりしたか？

李奉昌　いいえ。すべて本能ではありませんか。

白凡　革命闘争をするなら、本能を抑えることも知らねばならん。行こう。

李奉昌　どこに……？

白凡　拷問と飢えに関して臨床的に教育しようかと思う。

李奉昌　私のためなら結構です。

白凡　明日、朝鮮総督府を爆破するために同志をひとり送ることにした。

李奉昌　あ、そうですか。

白凡　叩くなら総督府をやらんとな。けちな田舎の警察署くらいでは……

李奉昌　もちろん、おっしゃる通りです。

白凡　金益相（キム・イクサン）同志を送ることにしたんだが、奉昌、君も一緒に行って教育を受けてはどうだ？

李奉昌　ここの食事はどうするんです…？

白凡　母上が大根菜っ葉の味噌汁を作っておいてくれるそうだ。

李奉昌　ああ、そうでしたか。

白凡　飢えに対する鍛錬は大根菜っ葉の味噌汁を目の前にしてやるのがふさわしい。ついて来い。

李奉昌　あ……はい……

白凡と李奉昌はそっと食堂を抜け出す。
しばらくして、張小姐が料理一皿とハサミを持って入ってくる。

張小姐　チン・シェンション……？（金先生）

荊軻は衛の者だ。荊軻は読書と剣術を好み、衛の君主・元君（ゲンクン）がその剣の腕を買って抜擢してくれることを期待していた。しかし、元君は彼を登用しなかった。そこで荊軻は燕に赴き、犬の屠殺屋から賢者に至るまで万人と付き合った。その誰もが、彼が普通の者ではないと思った。

折しも秦の人質となっていた燕の丹太子が帰還した。秦の嬴政王のひどい冷遇に、これを恨んで逃げてきたのだった。しばらくして、秦の樊於期将軍がやはり嬴政王の怒りに触れ、燕に亡命した。すると、すぐに丹太子は彼を受け入れた。ある臣下がこれを諫めて言うには、「いけません。あの凶暴な秦の王が燕に深い恨みを抱いているだけでも身の毛がよだつのに、ましてや樊将軍が燕にいることが耳にでも入ったならどうなさるの

です?」。しかし、丹太子は「樊将軍は身の置きどころを失い、私を頼ってきた。なのに、秦の脅しを恐れ、不憫な友を捨てるわけにはいかない」と言い、良策を求めていたところ、荊軻という人物が国にいることを知る。

丹太子は荊軻を招き、国事を議論しようとしたが、彼は謙遜し、辞退した。しかし、丹太子が彼の前に行き、深々と礼をし、再び丁重に請うと、ようやく承諾した。荊軻が言うには、「今秦へ行ったところで、私を信頼できる証なくしては、嬴政王に近づくことはできないでしょう。ところで、あの樊将軍は嬴政王が黄金千斤と万戸の領地をかけて探している者。もし、樊将軍の首と燕の地図を献上したなら、嬴政王は喜び、必ずや私に会うことでしょう。その時、私はやっと太子様にご恩をお返しできます」。すると、丹太子は「樊将軍は困窮し、私にその身を預けた。……他の手立てをお考えください」と言った。荊軻は、丹太子は樊将軍を見捨てられないと思い、自ら樊将軍を訪ねた。

荊軻「秦の将軍に対する扱いは実に残酷と言えましょう。一族を皆殺しにし、将軍の首に黄金千斤と万戸の領地をかけたそうです」

樊於期はため息をつき、「それを考えると、心魂に徹するほどの苦しみ。しかし、どうすればいいのかさえわからない」

荊軻「燕の懸念を払い、将軍の仇を討つ策があると言ったなら、どうなさいますか?」

於期「その策とは?」

荊軻「願わくは、将軍の首をいただき、秦の王に差し出そうと思います。そうすれば、王は喜び、必ずや私に謁見を許すでしょう。その時、左手で王の袖をつかみ、右手で彼の胸を刺したなら…そうなれば、将軍は恨みを晴らし、燕が受けた辱めもきれいに洗い流すことができます。将軍、いかがでしょう?」

樊於期「……昼も夜も思い煩っていたことが叶うのだから、躊躇うことなどあろうものか! 私の首をお持ちなさい」

樊於期が刀を抜き、自ら首を切り、荊軻に与えるとは……自身の肉を切り、首の骨を切断するその力、そしてこれに耐える力は天晴としか言いようがない。

荊軻は樊於期将軍の首を箱に入れ、匕首を隠した地図を懐に秘め、易水(エキスイ)の川岸で友と別れの挨拶を交わして旅だったが、友に一度手を挙げて挨拶をすると、その後振り返ることはなかった。

風蕭蕭兮易水寒　壯士一去兮不復還、風蕭々として易水寒し、壮士ひとたび去って復た還らず。

一九三一年十二月。
中国・上海のフランス租界のある食堂。
王社長と張小姐。
白凡が李奉昌を連れて入ってくる。

【註2】※2

王社長　(中国語)ライライ、チン・シェンション。(來來　金先生)

白凡　(中国語)ニイハオ、ワン・シャチョー。(你好　王社長)

張小姐　(中国語)クワイライ、チン・シェンション。(快來　金大丈)

李奉昌　(中国語)ニイハオ、シャオチエ。(你好　小姐)

白凡　(中国語)チン・ゲイウォー・イーワン・ジャージャンミェン・フー・イー
バ・ジェンダオ。(請給我一椀炸醤麺和一把剪刀)

張小姐　(中国語)ハオ　ハオ。(好　好)

白凡　(李奉昌を振り返り、大きな声で)今日は二人きりで折り入った話があるから客は取るな、高級料理をたっぷり用意してくれ。

王社長　(張小姐に)放っておけ。茶でも出してやれ。いつも炸醤麺一皿を注文して、ハサミを貸せだ。

張小姐が厨房に入っていく。

白凡　座れ、奉昌。

李奉昌　わざわざこんな所に……

白凡　君を死地に送り込むというのに、これくらいもさせてもらえんのか。

李奉昌　死地ではなく、永遠の快楽への道に赴くのです。

白凡　金ならある。

李奉昌　金を払っても行くことのできない栄光の道です。

白凡　壮士ひとたび去って復た還らず……

李奉昌　二度と油淋鶏も、辣子鶏(ラーズーチー)も、食べられませんが……

白凡　おいおい、金益相同志は戻って来たぞ。

李奉昌　朝鮮総督府を叩くために行った金同志が生きて戻ったんですか! 大事は成功ですか?

白凡　さて……成功なのか、失敗なのか……

李奉昌　どうなったのです?

白凡　勇ましく、最初はよかった。金益相は爆弾が入った鞄を体に括り付け、総督府の正門を通り過ぎた。すぐさま番兵が「誰だ」と問うたはずだ。「電気修理に来た」と答えると、奴は一度ちらりと見て「行け」と言ったそうだ。益相はすぐ二階に上がった。階段を上がってすぐの部屋が秘書課。益相は片手で取っ手を回して扉を開け、素早く爆弾を取り出して部屋の中に投げ込んだ。

李奉昌　ゴン!

白凡　不発だった。次の部屋は会計課。残りの爆弾一発を持ち、部屋の真ん中に向かって力いっぱい投げつけた。

李奉昌　……

白凡　バン!　建物を揺らす爆音と同時に椅子が吹き飛び、机

が壊れ、窓ガラスが粉々に割れて四方に飛び散ったそうだ。あの部屋、この部屋から人々が飛び出してきた。その混乱の中で益相は（日本語）「あぶない、あぶない！　上がっちゃいかん！」。

李奉昌　危ない、危ない！　上がっちゃいかん！

白凡　叫びながら階段を駆け下りたそうだ。そして、総督府の建物を出てもなお「危ない、危ない！」。

李奉昌　危ない、危ない！

白凡　その足ですぐに上海に飛び、昨夜、帰還の酒を一杯やっていた。

李奉昌　壮士ひとたび去って復た還らず……と言いますが、どちらにしろ成功ではありませんか？

白凡　だが今回も、机を壊し、ガラス窓を割った以外に何がある？

李奉昌　だとしても、神出鬼没の動きで日本人を戦慄させたのですから、これもまた成功ではありませんか？

白凡　……君の言うことにも一理はある。しかし、私は満足できん。

李奉昌　私がやります。お待ちください。

白凡　ところで、今回いい具合に大日本帝国陸軍大将の田中義一という者が上海にくるそうだ。こいつは日本軍の中でも徹底した軍国主義者だ。奴を消さぬうちは眠れん。

李奉昌　そうですか……東京に行く計画さえなければ、私の仕事なのですが。

白凡　天皇を撃ち殺すほどの仕事じゃなかろう。

この時、張小姐が茶を運んできて、テーブルに置く。

李奉昌　しっ、聞かれてしまいます。

白凡　大丈夫だ。この者たちに朝鮮語がわかろうはずもない。

李奉昌　あ、ええ。そうですね。

張小姐　寒いですね。どうぞ。

白凡　（間）君が事を成し遂げれば、上海の誰も我ら朝鮮人を軽んずることはできんだろう。国のない朝鮮の民はどこに行こうと、落ち葉のような身じゃないか。

李奉昌　見利思義　見危授命。

白凡　目の前の利を見ては義を思う、危うきを見ては命を授く？　君はこれをどこで聞いた？

李奉昌　安重根（アン・ジュングン）先生のお言葉と知っております。『安重根伝記』を読みました。

白凡　そんなものがすでに出たのか？

李奉昌　末文に押された手形が、何時も鮮明に私の頭の中にあります。どうして忘れられますか。薬指は第一関節で切られ、小指と同じ長さで押された……

白凡　断指したのだ……

李奉昌　何より伊藤博文と武士対武士として対峙した、その気概は敬慕に値します。田中が上海に来ると聞き、安重根先生の哈爾濱（ハルビン）での大事を思い出します。

白凡　誤解していることがある。一対一で対峙したのではない。敵の首魁を不意打ちするテロリスト的行為であり、正規戦の攻撃とは異なる。我らも同じだ。武士対武士の正攻法とは違う。

李奉昌　なぜです？　どうして一度も正面から討つことができないのですか？

白凡　それは……敵があまりにも強く、勢いがあるからではないか。

李奉昌　そうですか。

白凡　安重根は若いのに実に気概があった。

李奉昌　お知り合いでしたか？

白凡　ひと頃、父親の安泰勲（アン・テフン）と付き合いがあった。

李奉昌　そうでしたか。

白凡　さあ、立て。

李奉昌　はい？

白凡　計画を練るぞ。田中暗殺は三部隊で組織せねばならん。計画段階から失敗の可能性を排除するのだ。奴の行き先となる三か所に同志たちを配置し、続けざまに打撃を与える。田中、お前はもう死んだも同然だ！　王社長！

王社長　（出てくる）ああ、金（チン）さん。

白凡　急な用を思い出したので行かねばならん。頼んだ料理は今度だ。

王社長　ははは、そうはいきませんよ。すでに茹でて、切って、揚げているんですからね。高級料理をずらりと。

白凡　すまんことをした。

王社長　張小姐、料理はできたか？

白凡　なら、出かけてすぐ戻ろう。

王社長　さあ、持ってきますよ、高級料理を！

白凡　奉昌、先に出ていろ。

李奉昌　えっ？　先生、どうするおつもりですか……？

白凡　出ていろと言ったろう。

李奉昌、出ようか、出まいか、どっちつかずで様子を探り、店を出て行く。

秦の嬴政王は、燕の使者が樊於期の首と地図を献上するために接見に来たと聞き、快く使者と会うことにした。

壇上に上がった荊軻は、嬴政王が箱を開け、樊於期の首を覗き見ている間、地図を広げて隠してあった匕首を取り出した。そして、左手で嬴政王の袖を取り、右手で匕首を握り締め、刺そうとした。しかし、匕首が体に触れる直前、嬴政王が驚き、その身を引くと、袖だけがちぎれた。荊軻は匕首を手に追いかけ回し、嬴政王は柱の周りを逃げ回った。突然のことに、君臣たちは驚き、なす術もなかった。

嬴政王はどうにか刀を鞘から抜くと、荊軻の左足を斬りつけた。倒れた荊軻は嬴政王に向かって匕首を投げつけたが的中せず、カラン……銅製の柱に当たった。暗殺の失敗を知り、荊軻は柱にもたれ床に座り込み、笑いながらこう言った。「わが事が成らなかったのは、そなたを生け捕りにして脅し、太子に報いようとしたためだ」。荊軻が壇の下に転がり落ちると、その息の根を止めようと武将たちが襲い掛かり、彼の体にそれぞれ自分の刀を突きたてた。

一九三一年十二月。
中国・上海のフランス租界のある食堂。
王社長と張小姐、白凡、そして西洋人の男女。
テーブルに王社長と張小姐が座っており、白凡は布巾で空いたテーブルを拭いている。
別のテーブルでは西洋人の男女が拉麺を分け合って食べている。

張小姐　……こうして、秦への各国の抵抗は収まりました。嬴政王は天下を平定し、統一国家を打ち立て自らを皇帝と称しました。後に人々は彼を称え、始皇帝と呼んだのでした。

王社長　『史記・刺客列伝』、幕。

李奉昌が入ってくる。
あたりを見回し、白凡を見つける。

李奉昌　先生、何をなさっているんですか？

白凡　ごらんの通りだ。ここで数日、皿洗いと掃除をすることにした。

李奉昌　あの日、金がなかったのですか？

白凡　ある、あった。しかしだ、それは大事のために使う金だ。

王社長　乞食朝鮮野郎。

張小姐　聞こえちゃうわ。

王社長　奴らに中国語がわかるか。

張小姐　でも……

白凡　ところで、まだ東京に向かっていなかったのか？

李奉昌　今日は呉成崙同志、金益相同志、李鍾巖同志が大事に向かう日ではありませんか。それを見届けてから発っても遅くはないと思い……

白凡　お、そうだったか。どうなった？　奴が苦しむことなく即死だったなら残念きわまりない。

李奉昌　ええ、少々残念な結果になりました。

白凡　ほう、あまりにも紳士的に処断したようだな。さあ、話してくれ。

李奉昌　田中陸軍大将が下船した黄浦灘埠頭（ファンプタン）には多くの人たちが集まり、多種多様な人たちがいました。中国人、朝鮮人、そして倭奴、ロシア人、アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、フランス人、オランダ人、ポーランド人、イタリア人、ベルギー人、スペイン人、ポルトガル人、インド人、ベトナム人、フィリピン人、タイ人、エジプト人、トルコ人、イラン人……

白凡　もういい。

李奉昌　第一線を任された呉成崙は自他ともに認める射撃の名手です。田中がタラップを下り、満面の笑みを浮かべて出迎えに来た日本人に向かって手を振ったその瞬間、「今だ」と拳銃を取り出し、群衆の隙間から田中の胸元めがけ一発、パン！ ところが、田中の後から出てきた西洋の女が突然胸を押さえて倒れ込むではありませんか。命中を確信していた呉同志は、群衆の前に躍り出て両手を高く上げると、「大韓民国万歳、大韓民国万歳！」と叫んだ。この時、電信柱の陰に身を潜めて見ていた第二線の金益相同志は、歯がゆさに「外れたぞ、外れた！」と思わず声を上げた。この隙に、驚いた田中は小走りで迎えの車に向かいました。この機会をのがす金同志ではありません。田中の後頭部めがけてパン！さらにパン！　しかし、当たりませんでした。奴の帽子に穴が空いただけでした。そこで、金同志はポケットに隠し持っていた爆弾を取り出し、車に向かって投げつけました。ところが、どうしたことか。バン！　音がしない。安全装置を外し忘れたのです。すでに車は走りだし、後の祭り。この時、遠くで見ていた第三線の李鍾巖同志が回心の投擲！

白凡　バン！

李奉昌　李同志、どれほど悔しかったのでしょう。自ら口で爆発音を出すとは……爆弾は爆発せず、ちょうど前に立っていたイギリスの憲兵が足で蹴り、海に……

白凡は悔しさに声を上げる。

西洋人男性　とにかく中国人はうるさくてかなわんよ。

西洋人女性　しっ、けんかになるわ。人相も悪いわね。

西洋人男性　気にするな。俺たちの話がわかるものか。

西洋人女性　中国人じゃないみたいよ。

白凡　これはいかん。奉昌、東京に行く支度をしろ。敵の心臓部を直接討つしかない。

李奉昌　先生、発つ前に私も断指しようと思います。

白凡　なぜだ？　指を焼いて食ってでも行くつもりか？

李奉昌　見利思義　見危授命！

白凡　指を切るのは一瞬。目をつぶってやればできないこともないが、痛みと不便さは長く続くぞ。大事を前にやることじゃない。

李奉昌　しかし、安重根義士は……

白凡　彼の話はほどほどにしろ。君が大事に成功すれば、後世の青年たちは安重根より李奉昌を民族の英雄と語るだろう。

李奉昌　そうでしょうか？

白凡　さあ、港に行って、船便を調べろ。二、三日中に九州行

の船が出るはずだ。

白凡は前掛けをはずし、立ち上がる。

そして、王社長の前に行き、手を差し出す。

白凡　四日分の駄賃はこれまでの飯代に充て、残り二日半働いた分を計算してくれ。

王社長、小銭を数枚、白凡の手の上に落とす。

李奉昌　これは……

白凡　行くぞ。

白凡は李奉昌を前に出て行く。

西洋人男性　誰だ？

王社長　なに、物乞いみたいなもんですよ。

張小姐　ああ見えても、実は朝鮮独立政府の首席らしいわよ。

西洋人女性　あら……！

西洋人男性　日本の警察に密告すれば…あいつら、金づるだったか…。ところで、一体なにを騒いでいたんだ？

王社長　爆弾が毎回々々爆発しないとか何とか言っていたな。ところで、どちら様で？

西洋人男性　ああ……料理の値段はいくらかな……？

ハサン・サッバーフが暗殺教団といわれるアサッシン教団を設立したのは、十字軍の侵略が始まる六年前のことだった。歴史上、類をみないほどその名をとどろかせたアサッシン教団は、現在のテヘラン北西方向百四十キロにあるアラムート城砦（鷹の巣）を本拠地にし、熱心なシーア派イスラム教徒によって組織されていた。彼らは迫害されるシーア派の復興を目指し、時の大局を掌握していたスンニ派の権力者と指導者をひとり、またひとりと消していった。

西暦一一二九年、ヒジュラ歴五二二年。聖地エルサレム奪還を大義名分に西ヨーロッパの兵がアラブを侵略し、数十年に及ぶ殺戮と略奪の戦を繰り広げていたが、フランクの騎士たちが一致団結して攻撃を仕掛けてきたのに対し、アラブ各国は分裂していた。

アサッシン教団もまた分裂のひとつの枢軸だった。彼らは宗教的信念と部族間の反目を理由に、イスラム教徒の敵であるフランク軍と内通していた。これを繋いでいたのが、ダマスカスの宰相アル・マズダガーニだった。これに若き大将アタベクのブーリは憤然と立ち上がった。「どれほど多くの血が流されたか。どれほど多くの花のごとき乙女が恥辱にその麗しい顔を隠さねばならなかったか！シリアの兄弟たちがラクダの尻肉やハゲワシの内臓で命をつないでいるこのような時に、勇猛なアラブ人とペルシャ人が奴らの攻撃と辱めに耐えられず、敵と手を

結ぶとは！」

その日も王都の薔薇城に長官と大将らが集まっていた。一日の政（まつりごと）を締めくくる場だった。執政官は最後に退室するのが慣習だった。アタベクのブーリは最後まで席に残っていた。まもなく二人きりになった。ブーリは隠れていた姉に合図を送った。すると姉はアル・マズダガーニの頭に刀を振り下ろした。部族を裏切ったアサッシン教団の黒幕はこうして暗殺されたのだ。

「邪知深い術策に依存する者を神はどう処するか、よく見ろ！」。すべては神の御心、インシャー・アッラー！

一九三一年十二月。

中国・上海のフランス租界のある食堂。

王社長と張小姐。

白凡が李奉昌を連れ入ってくる。

李奉昌の薬指には包帯が巻かれている。

【註2】※3

王社長　（中国語）ニイハオ！チン・シェンション！（你好　金先生）

白凡　（中国語）ニイハオ、ワン・シャチョー（你好　王社長）今日は二人きりで折り入った話があるから客は取るな……。

王社長　笑わせるな。座れ。

張小姐　あら、若い人は指をどうしたの……？

李奉昌　固い決意を示すべきことがあり……。

白凡　錆びたナイフで誤って指を切り、破傷風にかかってしまったのだ。どれほど痛かろう。ぶらぶらとぶら下がった指を引きはがずわけにもいかず、だからとくっつけるわけにもいかず……この私の気持ちがわかるか？

李奉昌　申し訳ありません、先生。

白凡　君じゃなくとも、金祉燮同志が代わりにやり遂げてくれる。手紙が届いた。読んでくれないか。米粒みたいな小さな字で書いてある……（手紙を李奉昌に渡す）父が亡くなった時の話だ。山間の貧しい家で高名な医者を呼べるか、いい薬を手に入れられるか。祖母の臨終時に父が自分の指を切り、祖母の唇にその血を塗ってやったという話が思い出された。しかし、私がまた指を切れば、母が心を痛めるのではないかと思い、足を切ろうと決め、母のいない隙に左の太ももから肉を少しばかり切り取った。その肉を焼き、父に食べさせ、流れる血を口に入れてやった。だが、どうにも量が少ないようだ。そこで、また小刀を持ち、今度はもう少し大きく切ろうとした。勇気を千倍も出し、切った。しかし、切り取れず、痛いだけ。肉を手でつかみ引っ張ってみる。取れてくれれば食べさせることもできるが……祭壇を整えて弔問客を迎えた。切ったものの肉片を切り取れない足のせいで、涙が次から次へとあふれ出す。君がなぜ泣く？

李奉昌　実に悲しくて、この手紙が……

白凡　読んでくれ。

李奉昌　「同志諸君、爆弾三発とともに貨物船やましろ号の石炭倉庫に隠れ入り、上海を出発して十二日、二百八十八時間ぶりに私は敵国、日本に到着しました。九州の八幡に上陸し、ある旅館に入りましたが、この間、暗く狭い倉庫に隠れていたせいで運動もできず、一条の陽の光も浴びられなかったせいで顔は青白く、胸の動悸も激しく、手足を自由に動かすことができない一介の不具者となりました。しかし、睡眠は薬と言うではありませんか。三日間眠り続けたところ、やっと自分で立ち上がれるほどになりました。しかし、そのために宿代を思ったより支払う羽目になったのが残念でなりません」。

白凡　どうも年を食いすぎた後輩を送ってしまったようだ……

李奉昌　「私が日本に発つ時、四十円しか持っていなかったのはご存知でしょう。船では一日に一度握り飯を差し入れてもらっていましたが、これだけではどうにも我慢できず、漬物を少量ずつ、水も時折、煙草もしばしば差し入れてもらいました。これに五円ほど無駄使いをしてしまいました。上陸してから、密航の手引きをしてくれた船員が、協力してくれた者たちに酒の一杯もおごらねばならんと言うので、要求されるままに七円を渡してしまいました。また、東京まで一緒に行く旅費がないから、家に帰って金の算段をするから旅費五円をくれというので渡しました。しかし、いまだ戻ってきてはおりません。宿代は三泊で十二円です。この間、若干の雑費三円もかかりました。残りの金はわずか五円です」。

白凡　いや、八円残っているはずだ……

李奉昌　「あ、乗船直前に見送りに来た同志が三円を貸してくれと言うので渡しました」。

白凡　微々たる資金をむしり取るとは、どこのどいつだ？

李奉昌　「ここから目的地までの三等列車の汽車賃だけでも十五円です。また最後の時まで食べて過ごそうと思えば最低四、五円はかかり、目的地に行ってからの電車賃、人力車賃などに、少なくとも四、五円はかかります。ということは、二十円以上が足りず、周りには知る人ひとりいない他郷でどうすればいいのでしょう？」。

李奉昌が手紙を読んでいる間、王社長と張小姐、そして厨房から西洋人の男女が出て来て、手紙の内容を盗み聞きしている。

西洋人女性　悲しいわ……！

西洋人男性　実に気の毒だ。革命精神にあふれながらも、武力がともなわないとは。

白凡　いや、この人たちはこの間拉麺を食べていた…

王社長　その通り。一昨日から我らが上海大飯店の厨房担当になりました。特別に金（チン）さんの注文を担当する調理人たちです。

白凡　何の話だ……もしかして朝鮮料理でも作れるのですか？

王社長　小姐！

張小姐が布をかけた盆を持ってきてテーブルの上に置く。布を外すと、一塊の爆発物が置かれている。

王社長　この人たちはロシアのユダヤ系アメリカ移民で、歩き回る革命研究所とでもいいましょうか。

西洋人男性　すでにロシアでは革命が国家事業となり、もうアメリカでは革命は不可能になりました。

西洋人女性　私たちが両親から受け継いだのは、今や革命料理の製造法だけ。

白凡　さすらいの爆弾屋だな。

王社長　どのみち金（チン）さんにはこれが必要だし、性能のいい我らが上海大飯店の料理をお買い求めいただければと思い……

白凡　しばらく様子を見て買わせていただくというのでは駄目だろうか？

西洋人男性　金九首席についてのお話は概ねお聞きしました。しかし、革命事業では何よりも武力の質が重要です。

王社長　金（チン）さん、正直言って、これまで売り上げにも協力せず、この店を事務所代わりに使ってきたじゃありませんか。

西洋人女性　これまでの革命史を振り返ると、質のいい爆弾を使った革命家たちはすべて成功しています。しかし、不良品を使った大事はことごとく失敗し、命だけが吹っ飛んだのではありませんか？

白凡　今回持って行った爆弾は間違いない。必要になったら買おう。

西洋人男性　買って保管しておいても腐るものでも痛むものでもないでしょう。

白凡　さて、今のところは……

西洋人男性　わかりました。この爆弾の性能をみれば考えも変わるでしょう。外に出ましょう。

この時、アラブの民族衣装を着た女性が入ってくる。

アラブ女性　あの……失礼ですが……

一八九二年五月。米国ペンシルバニア州ホームステッドのカーネギー製鉄所でストライキが発生した。これに経営者ヘンリー・クレイ・フリックは、賃金を削減すると決め、労働者たちは争議に突入した。

ロシア出身のアナキスト、エマ・ゴールドマンと通称サーシャことアレクサンダー・バークマン。彼らはマサチューセッツ州ウースターでアイスクリーム店を開業したところだった。金を稼いで、祖国ロシアに戻り、革命資金として使うつもりだった。しかし、ホームステッドの蜂起を新聞で知った彼らは、すぐに

労働者たちの闘争に合流することを決め、その日の売上げわずか75ドルを手にして、オーナーに店を返した。ホームステッドに向かう途中、ニューヨークに下り立ち、同志を募っていた彼らに、思いがけない新たな知らせが伝えられた。経営者フリックが、機関銃で武装した弾圧のための私的部隊を動員して、明け方に労働者たちを急襲し、無差別乱射の末、数多くの死傷者が出たというものだった。エマとサーシャは計画を変え、フリックを直接懲らす決心をした。まずサーシャは本を読んで自家製爆弾を製造し、スタテンアイランドで爆破実験をおこなった。その日の夕方、サーシャが宿に帰ってくると、エマは『ロシア革命史』を読んでいた。

エマ「お帰りなさい。ところで、どうだった?」

サーシャ「……砂浜に爆弾を埋めて火をつけた。そして走った。砂浜を走るのがあんなに大変だとは思わなかったよ」

エマ「そうでしょうね。足が砂にすくわれるでしょうから。それで?」

サーシャ「しばらく走った」

エマ「それで?」

サーシャ「走って、また走った」

エマ「だから?」

サーシャ「無我夢中で走った、無我夢中……」

エマ「ああ、それで?」

サーシャ「それが爆発しないんだ!(間)だめだ。僕ひとりでもフリックのところに行く。拳銃が一丁あればいい」

エマ「私も一緒に行くわ、サーシャ」

サーシャ「いや、エマ。君は僕がフリックをやった後、事の正当性を大衆に伝えなければならない」

エマ「でも、私は女だから、あなたよりフリックに近づきやすいわ」

サーシャ「君はここで僕を助けるための仕事が山のようにある。革命には長い時間がかかるからね」

エマ「同志というのは生死を共にするものよ、サーシャ。あの時、ソーフィヤも、ゲーシャもそうだったじゃない」

サーシャ「どこにいようと、僕たちの心がいつも一緒なら、それでいいんだ、エマ」

一八八一年三月、ソーフィヤ・ペロフスカヤが率いる暗殺団が、ペテルブルク中心街を通り過ぎる皇帝アレクサンドル二世の馬車への爆弾投擲に成功した。最初の爆弾で馬車が壊れると、皇帝はすぐに馬車から飛び降りた。すでに多くの近衛兵たちが倒れていた。この時、二発目の爆弾が飛んできて、彼の体をずたずたに引き裂いた。

事を成した彼女は、逃避行の前に同志のアジトを訪ねた。アジトではユダヤの女性革命家ゲーシャ・ゲルフマンが番をしていた。

ソーフィヤ「ゲーシャ、成功よ! 人民の名のもとに皇帝を断罪したわ!」

ゲーシャ「人民万歳! 本当に立派よ、ソーフィヤ!」

ソーフィヤ「さあ、早くここを発たなくては」

ゲーシャ「彼はどこ?」

ソーフィヤ「すでに身を隠したわ」

ゲーシャ「なら、ここは私に任せて、あなたは先に逃げて。私は直接関わっていないから大丈夫」

ソーフィヤ「あいつらが狙うのは直接関与した者だけじゃない。あなたまで首謀者に追い込んでロシア内のユダヤ人革命勢力を一掃しようとするわ。さあ、急いで」

ゲーシャ「でも、彼がここに立ち寄らないかしら」

ソーフィヤ「ユダヤ人たちの運命はあなたの安全にかかっているのよ」

ゲーシャ「彼にもう一度だけ会ってから……」

ソーフィヤ「そんな時間はないの」

ゲーシャ「ソーフィヤ、彼が生きているなら私も生き、彼が死んだなら私も死ぬ。私は彼の子を身ごもっているの」

一九三一年十二月。
中国・上海のフランス租界のある食堂。

白凡と李奉昌、西洋人男性、西洋人女性、アラブ女性、そして張小姐。
アラブ女性は大きな腹で厚い本を読んでいる。

西洋人男性 お品をご覧いただいたのですから、信用いただけたでしょう?

白凡 東京からの知らせを待つことにしよう。

西洋人女性 爆弾のデザインもいかようにもできます。りんご爆弾、人形爆弾、パン型爆弾、水筒型爆弾、弁当爆弾……

李奉昌 値段はいかほど……

西洋人男性 ひとつ二百円。

白凡 その値段では買えん。

西洋人男性 投擲用爆弾を買っていただければ、自爆用爆弾はサービスしよう。

白凡 あの女性は何をあんなに熱心に読んでいるのだ?

張小姐 『罪と罰』。ドストエフスキー。

西洋人女性 本の形の爆弾も作れます。

張小姐 バクダッドから来たのよ、おそらく。イギリス人と結婚して、新婚旅行に上海に来たけど、男は逃げ出したようね。

李奉昌 いや、よくこんな遠くまで花嫁を捨てに来たものだ。

アラブ女性 風蕭々として易水寒し、壮士ひとたび去って復た還らず……

西洋人男性 本当に買わないつもりか?

白凡 少し待てと言っているだろう!

王社長が新聞を手に持って入ってくる。

王社長　金（チン）さん！　ついに新聞に出たぞ！

白凡　おお、そうか。読んでくれ。

王社長　「東京二重橋で爆弾投擲とは！……現場の光景を見るに、当日午後六時過ぎ、皇居二重橋付近を徘徊する男がいた。夜になり入口を警備していた巡査が参観はできないので帰るように言ったところ、男はすぐにその場を去った。しかし、しばらくしてまた戻り、徘徊をはじめた」。

李奉昌　二重橋付近ならよく知っています。金祉燮同志の動きはこうだったはずです。八幡で持ち物をすべて質に入れ、どうにか金を作って、やっと東京までたどり着いた。帝国議会に突入して高官たちを一挙に爆死させるか？　いや、議会は休会中だ。いつ開会するかは未定だと？　なら…よし！　懐はすっからかんだが、爆弾は持っている。えい、クソ。皇居に入り込んでやる。成功さえすれば、大日本帝国の根源を引き抜いてやったも同然だ。皇居に行くぞ！

王社長　「巡査が再び何者かと尋ねると、すぐさま彼は爆弾を取り出し、巡査に狙いを定めて投げつけた。しかし、爆弾は二重橋の真ん中に落ち、爆発しなかった。この時、近衛連隊兵がこの光景を見て銃を構えた。彼はすぐに二発目の爆弾を投げたが、正門の石垣の上に落ちた。不発。番兵が彼を橋の欄干の上で取り押さえたが、三発目の爆弾が投げつけられた。やはり不発。この間に他の番兵たちが駆け寄り、彼を逮捕した」。

張小姐　何てことなの。爆弾は船内の湿気で故障してたのね。

西洋人男性　ほら、ごらんなさい。不良品の爆弾を使うから事を台無しにして、惜しい命だけが消えていくではありませんか。

白凡　故障した爆弾を投げたのなら未遂だろう。無罪だ。

王社長　「金祉燮、一審で死刑！」。

白凡　これはいかん。奉昌、君が発つ時が来たようだ。手はすっかりよくなったか？

李奉昌　はい、この時を待っていました。

白凡　君の肩に我ら独立闘争の生死がかかっている。君を信じているぞ。

李奉昌　先生、士は己を知る者のために死すというではありませんか。

王社長　そして、女は己を悦ぶ者のために容づくる。「士爲知己者死　女爲悦己者容」。この言葉を残した豫讓は、その後どうなったか？　豫讓は復讐のため名を変え、姿を変え、趙襄子の館に厠番として潜入し、厠の壁を塗る仕事をした。懐に匕首を抱き、機会に乗じて趙襄子を殺そうとしたが……小姐、お前が趙襄子をやれ。俺は豫讓やる。さあ、このあたりが厠だ。俺はこうして梁に上がって隠れる。あっちから趙襄子が入ってくる。

張小姐が数歩後ずさり、入ってくる。

張小姐　あ！　あそこにいるあの者、怪しいぞ。

王社長　おい、早すぎる。用を足してから……

張小姐　（服をめくり上げてしゃがむふりをする）あ！　あいつは何者だ？

豫讓は懐から匕首を取り出し、趙襄子に襲い掛かるが、すぐに取り押さえられる。

王社長　智伯の恨みを晴らそうぞ。

張小姐　義理堅い奴だ。智伯は滅び、後継ぎもなし。なのに、家臣として主君のために仇を討とうとするとは、この者こそ天下の賢人。さあ、行け。お前をどうして殺せよう。私が注意を払い、事を避ければいいだけのことだ。

王社長　その後、豫讓は橋のたもとに隠れ、趙襄子が通るのを待った。襄子が橋まで来ると馬が突然驚いた。襄子は「これは間違いなく豫讓だ」と、馬から下りた。小姐！

張小姐　これは間違いなく豫讓だ。

豫讓が橋の上に飛び上がると、趙襄子は一瞬にして彼を取り押さえる。

張小姐　そなたはその昔に范氏と中行氏に仕えていた。智伯はその両氏を滅ぼした。だが、両氏の仇は討とうとせず、智伯の臣下となった。なぜそこまでして執拗に智伯の仇を討とうとするのだ？

王社長　私は范氏と中行氏に仕えていたが、両氏の私への処遇はあくまでも人並みだった。だから、私も人並みに報いたまで。しかし、智伯は私を国士として遇してくれた。だから、私も国士としてそれに報いるのみ。

張小姐　ああ、豫讓よ！　そなたはすでに忠節としての名誉を遂げ、そなたを許すのもすでに十分であろう。ゆえに二度と逃すまい。覚悟しろ！

趙襄子が刀を高く振りかざし、豫讓を斬ろうとする。

王社長　お待ちを！　聞くところによると、「賢明な君主は人の美点を覆い隠さず、忠臣は節義のために死を遂げる義務がある」と言います。願わくば、あなた様の御衣を賜り、それを斬り、仇を討ったことにしたいと思います。この願いが聞き入れられるなら、たとえ死んでも思い残すことはありません。

張小姐　誰か、朕の衣をもて。

王社長　そんな時間がどこにある？

張小姐は服を脱ぐ真似をする。

王社長　本物の服でやらんと実感がでない。

張小姐、服を脱ぎ、王社長に渡す。

王社長　これでやっと土の下に眠る智伯に報いることができた！

王社長は刀を抜き、三度飛び跳ね、服を斬りつける。

その後、刀に伏せて自らの体を貫いて自決する。

王社長　ああっ！（間）はははは！　天皇の御衣を手に入れるのもなかなかいい策だぞ。

王社長は豪快に笑い、白凡を見る。

白凡は不愉快さを我慢し、西洋人男性を振り返って見る。

白凡　いくらだったかな？

西洋人男性　二百円。

白凡　百円で手を打とう。

西洋人男性　百五十円。

白凡　本当に金がないんだ。

西洋人男性　百二十五円。

白凡　十円、上乗せしてやろう。

ウースターからニューヨークまで汽車賃を払い、エマの手元に六十ドルが残った。ニューヨークに到着後、あれこれと二十ドルの費用がかかり、爆弾の材料を購入するにも相当の金を支払った。ピッツバーグに行くには、さらに五十ドルは間違いなく必要だ。エマは仕方なくサーシャを先に送り出し、自身はニューヨークに残って資金を作り、送金することにする。でも、どうやって……？

一九三一年十二月。

中国・上海のフランス租界のある食堂。

アラブ女性。

彼女はパク・サンヒョンの戯曲『刺客列伝 Terrorists』を読んでいる。

アラブ女性　……数日後、ベッドから出ようとした時、いいことを思いついた。通りに立つことだった。そうよ、体を売るの。どうして思いつかなかったのかしら。『罪と罰』の少女を思い出した。気の弱いソーニャだって体を売ったのに、私にできないはずはない。私にはソーニャよりももっと大きな理由がある。サーシャ、彼のためよ。人民のためなのよ。でも、本当にできるかしら？　知らない男の人と？　お金を稼ぐために？　私は枕に顔をうずめた。弱虫の臆病者。サーシャは命を差し出した。なのに、あんたは体をつかの間差し出すだけなのに、何をためらっているの？　どうにもならない臆病者！　数時間、横になっていたが、ついに私は起きだし、鏡の前に立った。

夕方になると、エマは夜の通り十四番街に出かけた。向かいのアパートで働いているメイドに五ドルを借りて、レース飾りの下着とストッキングを買って身に着け、ハイヒールを履いた。彼女は通りのこちらの端からあちらの端へ、あちらの端からこちらの端へ、休むことなく歩いた。サーシャはわかってくれるかしら？　わかってくれるわ。目的は手段を正当化できると、彼はいつも言っていたじゃない。数十回通りを往復すると、心が落ち着いてきた。でも、実際に見知らぬ男が近づいてくると、再び早足になるのだった。夜十一時がすぎ、生まれて初めて履いたハイヒールのせいで足はむくみ、疲れが出始めた。エマは最後の決心をする。これから一番初めに近寄ってきた男に何も考えずついていくのよ。まもなく身なりのいい老紳士が近づいてきて話しかける。

紳士「Let's have a drink, little girl?」

エマ「えっ？」

紳士「どこかで一杯やりましょう、お嬢さん？」

エマ「All right」

彼らは近くのサロンに入る。会話もなく、二人はビールを飲む。

紳士「お嬢さんはこの仕事に関してはひよっこのようだ、そうだろう？」

エマ「……どうしてわかるの？」

紳士「お嬢さんを見ていたんだ。男が近づいてくると真っ青になり、早足になる。通りに立つ理由が何であれ、好奇心や楽しみのためじゃないということだ」

エマ「そうよ、ここでは経済的な圧迫と搾取で数千もの若い女性たちが通りに立つことを余儀なくされているんですもの！」

紳士「そんな話をどこで聞いたのかね？」

エマ「……」

紳士「未来では空からバットマンが下りてきて、貧しいニューヨーク市民に金を分け与えるという話を聞いた」

エマ「……」

紳士「私は経済的問題には関心がない。お嬢さんがどうして通りに立つことになったのかも知ったことではない。しかし…ひとつだけ尋ねよう。娼婦稼業もテクニックがあってこそ。お嬢さんはそれを学んだのかな？」。そして、彼は十ドル紙幣を取り出し、エマに差し出す。「さあ、これを受け取って、家にお帰り」

エマ「私と寝るわけでもないのに、なぜお金をくれるの？」

紳士「衣装代がかかったと思うがね。もしお嬢さんが本物のストリートガールになるつもりなら、私はおそらく気にもかけないだろう。しかし、どうにか計画通りに事が運んでも、お嬢さ

んは後々まで後悔する」
エマ「後々まで？」
紳士「お嬢さんは魅力的だ。しかし、愚かで純真な子どもだ」
エマ「二十三歳よ」
紳士「驚いた！　でも、歳をとった人間もばかになることがある。私をごらん。私は今年六十一歳だ。なのに、時折ばかな真似をしてしまう」
エマ「あなたの名前と住所を教えてください」
紳士「……バットマン」
通りに出たエマと紳士は握手をして、互いに反対方向に歩き始める。
エマは言う。私が体を捨てなかったのは、結局サーシャを愛しているから？　体を売ってサーシャにお金を送ったなら、本当に幸せだったかしら？　今よりもずっと？　サーシャと運命を共にできなくとも、私が幸せなのはどうして？　あの時、夫とお腹の子と一緒に死んだなら、ゲーシャは幸せだった？　でも、サーシャに送るお金をどう準備しよう……？
ゲーシャ・ゲルフマンは事件後、暗殺事件の首謀者たちと共に逮捕され、絞首刑を宣告された。しかし、妊娠していたため処刑はされず、国際社会からの圧力で無期懲役に減刑され、シベリアに送られた。

夫の処刑の知らせは聞かされなかった。いや、夫が生存していると信じ、彼女は毎食黒いオーツ麦のパンを水で流し込み、出産を待っていた。日々、子守唄を練習しながら……
一八八一年十月、ゲーシャは難産の末、月足らずの子を産み、子どもはすぐさま孤児院に送られた。

一九三一年十二月。
中国・上海のフランス租界のある食堂。
白凡と李奉昌、張小姐、西洋人男性。
西洋人男性はカメラをいじっている。
白凡が李奉昌に古い札束を握らせる。

白凡　李奉昌君、死への道だ。この金は東京に着くまでにすべて使え。到着したらすぐにまた送金しよう。写真を一枚撮ろうじゃないか。今度生まれる時は自主独立国家に生まれ、断指することなく、天命まで五体満足を保とうではないか。（爆弾をひとつ渡す）さあ、そしてこれ…（またひとつ渡し）これはおまけだそうだ。

李奉昌は爆弾を両手に握り、カメラの前に白凡と並んで立つ。

西洋人男性　さあ、笑って！（間）さあ…さあ…
李奉昌　先生、私はこれから永遠の快楽を得るために旅立つのですから、どうか笑顔で写りましょう。

白凡　写真代もサービスだろうな。

二人、明るい笑顔。
張小姐がフラッシュをたく。

二〇〇二年十月、モスクワ、ドゥブロフカのミュージカル劇場に、ロシア軍のチェチェン撤退を求める五十人の武装勢力が侵入し、観客を人質にロシア軍、警察と対峙していた。犯人たちの中にはチェチェン紛争でロシア軍に夫を殺された未亡人も十八名含まれていた。
一七八三年から始まったロシアのチェチェン侵略は、焦土化作戦、強制移住、虐殺、強姦による植民化の歴史だった。「ロシア兵ひとりも殺せないような男は結婚もできない」と言われるように、チェチェンの男たちは進んで妻子を残し、独立のために命を捧げた。一九九一年にソ連が崩壊すると、チェチェンは再び独立を宣言した。しかし、チェチェン地域の莫大な石油を放棄できないロシアは、一九九四年と一九九九年に侵攻を再開した。しかし、人口八十万人のチェチェンにはまだ戦士たちがあふれていた。
劇場の客席。最後列にイスラム教徒の女性が被るヴェール、ブルカを被った三人の女戦士が腰に爆弾を装着し座っていた。
「……本当に……静か……ね」
「……みんな……寝ているもの……」
「……見て……ヤナイェクも……警戒しないと。あんな風に寝てていいのかしら」
「もう四日目じゃない……みんな、疲れ果ててる……」
「……あそこ、あの子を見て。今夜はまったく寝ないわね……」
「……本当にきれいな目……」
「……蜂の巣にされて死んだうちのヤセンカを思い出して」
「……心配しないの。あの子がいくら可愛くても、この爆弾の紐は引くから」
「……外も本当に静かじゃない？」
「……居眠りしているうちに、奴らが突入してきたら……？」
「人質は七百人、軽々しく突入できる……？」
「紐をしっかり握って。何か物音がしたら引くのよ」
「……それにしても……本当に……静か……」
「……何の匂い……何か匂わない？」
「……毒ガス？」
「……毒ガスは無色無臭よ。気づかないうちに一瞬であの世行き」
「……あなたがおならでもしたんじゃない？」
「……ああ……ベロフが恋しい……彼のおならの匂いまでもが恋しい……」
「……私はあの人の顔が思い出せない……駆け寄ったら、爆弾で頭が吹き飛ばされていた」

「……首が体からちぎれる時……あんたをもう見られないって、頭が悲しんだかしら……あんたをもう抱けないって、体が嘆いたかしら？」
「……私がロシアの奴らに犯された後、あの人は一度も私を抱かなかった」
彼女たちの体が、瞬間、数度揺れ動く。
「……ああ、ふらふらする……」
「でしょう？　ウォッカを一瓶飲み干したみたいに……」
「あ！……あそこ……」
「どうしたの？」
「……あそこ……ベロフ……」
「……どこ……？」
「……あそこ……あそこよ……私に手を振っているでしょう……」
「……どこ？」
「あそこ……」
「……本当……」
「……ベロフがあの世から休暇で戻ったみたいね。私のあそこの匂いが懐かしくて……」
「……あ……あの人もいる……その後に……」
「……本当……あの人も……」
三人、椅子から立ち上がり、前に出てくる。

「気を付けて。紐を放しちゃだめよ」
「わかった……」
「……でも、あの人、どうして後ずさりしているの？」
「……あなた……！」
ひとりが振り返る。
「……あそこ……あそこに……」
「……何？」
「……あそこ……あそこに、私が座っている」
「……どこ？」
三人、全員立ったまま振り返る。
「あそこよ」
「……本当……」
「私もそのまま座っている……」
「……私たち……死んだ……ってこと？」
消えかかった音が一瞬再生されるように、爆音と銃声が聞こえてくる。
ロシアの特殊部隊は、明け方四時に神経ガスを投入した。武装勢力と人質を窒息させ、麻痺させた後、鎮圧作戦を敢行したのだった。

一九三二年一月。
中国・上海のフランス租界のある食堂。

白凡と張小姐。
白凡はテーブルに向かい猫背で何かを書いている。
その横で張小姐が高粱酒を飲んでいる。

張小姐　……風蕭々として易水寒し、壮士ひとたび去って……違う、酔ったかしら？（間）風蕭蕭兮易水寒　壮士一去兮不復還！　金先生、金先生、何をそんなに一生懸命書いているの？
白凡　自伝だ。ほぼ完成し、今は附録を書いている。
張小姐　まだまだ先は長いのに、なんで今から自伝を書いているの？
白凡　家も、国もなく、風餐露宿の追われる身、いつどこで死ぬか誰にもわからん。
張小姐　読んでちょうだい。
白凡　小姐は我が国の言葉がわかるのか？
張小姐　もう、いいじゃない。李奉昌からの知らせはどうしてこうも遅いのかしら……
白凡　私は、我々の国家が、世界でもっとも美しい国となることを願っている。もっとも富強な国となることを願うものではない。己が他人の侵略に胸を痛めさせられたのだから、己の国が他国を侵略することは望まない。我々の富は、我々の生活を豊かにするにたりれば十分であり、我々の力は、他国の侵略を防ぐにたりれば十分である。ひとえにこの手にしたいのは高い文化の力のみ。文化の力は我々自らを幸せにし、ひいては他人にも幸を与えられるからだ……

この時、王社長が新聞を振り回し駆け込んでくる。

王社長　先生、金先生！
白凡　何を騒いでいる、王社長？
王社長　日本の奴らが乗り込んできた！日本の奴らが上海に攻め込んできた！

張小姐ももそもそと体を起こす。

白凡　上海に、どうして？
王社長　この新聞記事のせいだ。（中国語）韓人李奉昌、韓人李奉昌狙撃日皇不幸不中。
白凡　また失敗したのか……ああ、李君、李奉昌君！

白凡はテーブルに突っ伏し、むせび泣く。

張小姐　ああ、李さん…
白凡　李奉昌君！
張小姐　李さん！

「狙撃日皇不幸不中」。中国の新聞が日本の軍部を刺激し、上海事変を起こす口実の一端となった。「狙撃日皇不幸不中」、朝鮮人の李奉昌が天皇に向け爆弾を投擲したが、不幸にも、実に惜

しいことに、無念なことに、的中させることはできなかった。

一九三二年四月。
中国・上海のフランス租界のある食堂。
白凡、尹奉吉、そして張小姐。

白凡　……相手を制圧する時は急所を責めるのが肝心だ。胸倉をつかんでも、ただ服をつかんでしまっては、相手に反撃の機会を与えてしまう。こうしてしっかりつかみ、のど元を締め上げるんだ。わかったか、奉吉。

尹奉吉　はい、先生。

白凡　私の胸倉をつかんでみろ。

尹奉吉　はい、先生。

尹奉吉、白凡の胸倉をつかむ。

白凡　しっかりつかめ、ぎゅっと。

尹奉吉　ぎゅっと。

白凡、気合とともに尹奉吉を背負い投げで制しようとするが、思い通りにならない。

張小姐　まあ！　強い……

白凡　君は強靭なようだ。（張小姐に）今日は二人きりで秘密の話があるから客は取るな。

張小姐　（中国語）ハオ、ハオ。（好　好）

張小姐は厨房に入っていく。

白凡　奉吉、君がこのように平静なのをみていると、今回は成功すると確信が湧いてきた。

尹奉吉　今日、事前調査も兼ねて虹口（ホンキュウ）公園に行き、慶祝式の会場を見ましたが、白川大将も来ていました。奴の横に立った時、明日まで待てるものかと……！

白凡　わかるぞ、何を言いたいのか。明日まで待てるものか……

尹奉吉　今日爆弾を持っていたなら、その場ですぐにでも殺せたのに！

白凡　悔しいがどうにもならん、明日まで待つしかない。

尹奉吉　大きな石を手に取り、奴の頭をかち割ってやろうかとも考えました。

白凡　いや、だめだ、だめだ。明日になれば大勢の大将や高官が、私の爆弾一発で続々と倒れるだろうに、奴ひとりの命では満足できん。

尹奉吉　だが、猛獣が獲物を目の前に我慢しなくてはならないのは……

白凡　猟師がキジを撃つ時、まず飛ばせてから撃ち落とすもしかり、眠っている鹿は撃たずに走らせた後に撃つのもしかり、

すべて猟の快楽のためではないか！

尹奉吉　（間）だから、ぐっと堪えて帰ってきました。

白凡　よし、よくやった。君こそ英雄の心意気あふれる大韓の男だ。

尹奉吉　お恥ずかしいかぎりです。先生のような真の英雄が褒めてくださるとは。士は己を知る者の……

白凡　いや、私は違う。

尹奉吉　女は己を……

白凡　違うと言っているだろう！（間）運命ゆえに、こうしてここまで来たが、私こそ片田舎にうずもれ、農夫として暮らせば、ただの凡人にすぎん。

尹奉吉　とんでもありません……女は己を……

白凡　幼くして凋落した家を建て直そうと勉強はしたが、金で科挙に及第できる時代に青雲の志なぞ端から見込みなどなく……十九歳で東学を知り、青年指導者になって意気がっていた。しかし、甲午年に敗軍の将となり、清渓洞（チョンゲドン）に住む西学の安圭洪（アン・ギュホン）宅の居候に転落した。その時、安圭洪の兄弟たちも、幼い子どもたちも、私を冷笑していた。またある時は、頭を丸め仏門にも入ったが、腰を据えて修行したかと問われれば、これもどうだか。だからと、親孝行をしたかといえば…妻にも生涯いい暮らしどころか…長い間、私のせいで苦労ばかりし、病に倒れた妻の臨終も看取れなかった。肺炎を患った妻はフランス租界の外の病院であの世に旅立ったが、訪ねて行くことができなかった。

尹奉吉　日本の警察と密偵がうろうろしているのですから、仕方がなかったのでしょう。

白凡　だとしても、最後くらい看取ってやるべきだった。それが夫となった者の道理ではないか。私はこんなにもだめな人間なのだ。

尹奉吉　先生は臨時政府の首席です。平凡な者がどうして政府の長になれますか。

白凡　上海に向かうと決めた時、ただ臨時政府の門番でもしようと来たのだ。しかし、私が国務総理に就任した時、臨時政府には李東寧（イ・ドンニョン）先生と李始榮（イ・シヨン）先生、安昌浩（アン・チャンホ）同志、数名がいるだけだった。それが、いつの間にか、亡くなったり、離れて行ってしまい、誰が臨時政府を預かる……！

尹奉吉　いつか大韓が独立を迎えれば、この辛苦の歳月も歴史に燦然と輝くのです。

白凡　そうだ、そうなることだろう。最後に望みがあれば言ってみろ。

尹奉吉　先生、もし「お前の望みは何だ？」と天がお尋ねになるのなら、私はためらうことなく、「私の願いは大韓の独立です」と答えるでしょう。「次の願いは何だ？」と聞けば、私はまた「我が国の独立です」と言うでしょう。「その次の願いは

何だ？」と三度目の問いにも、私はさらに声を高くし、「私の願いは我が国大韓の完全な自主独立です」と答えます。

白凡　君、『白凡逸志』を読んだのだな！　そうだ、この金九の願いは、ただそれのみ！

尹奉吉　独立の礎になるのなら、命を百度差し出しても惜しくはありません。

白凡　見利思義、見危授命。

尹奉吉　利を見ては義を思い、危うきを見ては命を授く！『論語憲門編』の一節ですね。

白凡　えーと……そうだったっけ？（間）王社長、王社長、行くぞ！

王社長が厨房から出てくる。
後から張小姐が弁当型の爆弾と水筒型の爆弾を手に持ち出てくる。

白凡　品物をくれ。

西洋人男性が爆弾を白凡に渡す。

白凡　いくらだったかな……？

王社長　お持ちください、金先生。天皇に爆弾を投げつけるなんて、中国人には思いもつかなかった。朝鮮には英雄が大勢いるのを知った今、どうして金を受け取れますか。

白凡　ただには不良品が多いというが……

西洋人男性　今回は、心血を注いで製造したものですから信じていただいても結構です。

白凡　感謝する。（尹奉吉に爆弾を渡し）行こう。大根菜っ葉の味噌汁を頼んでおいた。

尹奉吉　貴重なものを……！

王社長　高級料理を準備したのに……今回は本当にごちそうさせてくださいよ。

白凡　最後の夕飯だ。朝鮮の大根菜っ葉の味噌汁以上のものがあるか。

王社長　すぐ出せます。小姐！

張小姐　（厨房から）はい、今行きます！

白凡　私の分の牛脂を君のに少し入れてくれるよう言っておいた。

尹奉吉　あ、はい！

王社長　壮士ひとたび去って復た還らず。二度と炸醤麺も古老肉も味わうことはできないですよ。

尹奉吉　大根菜っ葉の味噌汁を味わえるでしょうか。行きましょう、先生。

西洋人男性　待て！　それなら、最後に写真を一枚……

西洋人男性がカメラを持って来る。
白凡と尹奉吉、カメラの前に並んで立つ。

尹奉吉　（白凡の時計を見て）先生、私の時計と交換しましょう。

白凡　なぜだ？

尹奉吉　私の時計は六円で買ったものですが、先生のは二円ではありませんか。私にはあと一日しか必要がありませんから。

白凡はしばらくふたつの時計を見比べ、その後、交換して腕につける。

西洋人男性　さあ、笑って！

仮に。

仮に、ある国がある国に侵略された時、敵があまりにも強く、あまりにも強くて到底太刀打ちできないとしたら、ふたつの道があるのみ。ひとつの道は屈服して奴隷となること、もうひとつの道は全滅を覚悟すること。しかし、全滅を選んだとしても、ただ黙って死ぬ者はおらず、それは歴史が物語っている。演劇「刺客列伝 Terrorists」は、これまでそれをお見せしてきた。だとしたら、はたして過去だけがそうなのだろうか？
もしも近くも遠くもない未来に、例えば西暦二〇三一年、地震と原子力爆弾で地球のあらゆる場所が破壊され、世界秩序は新興帝国の中国と牙を抜かれた虎となったアメリカとの対立に集約されたとしよう。

大様奉昌【註3】は日本国の者だ。若くして航空自衛隊に入隊し、炊事兵として勤務していた大様は、除隊後、全日本寿司王大会で優勝し、皇室の調理師として特別採用されるという栄誉に預かった。中・米戦争が終わりを迎えようとしていた頃、中国は終戦の条件として日米同盟の破棄を要求した。アラブ連盟の本土攻撃で余力を失っていたアメリカは、これを受け入れいるしかなかった。ついに米軍が列島から撤退すると、すぐさま中国は日本侵攻を開始した。一日四千回にも及ぶスクランブルで自衛隊の防空網を麻痺させ、四方の海岸から上陸して開戦から一週間で九州と四国を掌握し、本州への進撃を目前にしていた。日本の総理大臣と防衛庁長官が、富士山のふもと地下百五十メートルにある皇室の防空壕を訪ね、黒仁天皇と秘密会議をおこなったその日の夜、大様はその部屋の片隅で黙々と寿司を握っていた。

総理「天皇陛下、北海道までもが中国軍に掌握されたそうです」

長官「中国はまず在来式屑鉄ミサイルを激しくあびせ、ミサイル防御システムを不能にした後、新型ミサイルで攻撃してきております」

総理「現在、中国の航空機と落下傘によって、地上は太陽光が遮断され、わずか四日ほどで気温が二十度も下がったそうで

す」
長官「奴らの爆撃の正確さはひどいもので、その大部分が民間施設を破壊しています」
総理「撃墜された中国飛行機の落下によって、地上の被害は爆撃の被害よりも何倍も大きくなっています」
長官「これは新たな概念の現代戦といえます……」
総理「ついに中国は東京に核爆弾を投下すると最終通達をしてきました」
天皇「……アメリカは約束したのに……ジョージ・ブッシュ三世が実に憎い。日米英が共に敵から「悪の枢軸」と名指しされていたのに、この期に及んでなぜ日本を見捨てる」
総理「陛下、泣いてしまいたい心情でございます」
長官「うっ、うっ、うっ……!」
総理「今となっては奴らの要求を呑むしか…」
長官「私は、陛下にこのような進言を差し上げるしかない私の不忠を許せず、割腹しようとこのように……」
天皇「降伏の条件は何だ?」
総理「太平洋側の海岸開発権と沖縄の割譲、横浜港と長崎港の百年租借権、東京上野公園に中国軍司令部の設置、そして平和憲法への復帰など、総九十九項であります」
天皇「有史以来、独立を守ってきたこの国を丸ごと飲み込むつもりだな……降伏調印式を準備するのだ」
この時、大様奉昌が憤然と立ち上がり、天皇の前に進み出る。
大様「陛下! いけません」
天皇「大様君、朕は驚いたぞ」
大様「降伏など、とんでもございません」
総理「とんでもないと。何か手立てがあるのか。身分をわきまえよ、寿司王」
大様「見利思義 見危授命!」。
総理「……利を見ては義を思い、危うきを見ては命を授く……?」
大様「その昔、朝鮮の安重根先生がおっしゃった言葉です。お願いがございます。私に飛行機を一機いただけましたら、単身乗り込み、敵の心臓部を木っ端みじんにしてまいります」
この時、しばし約十二秒の沈黙が流れたという。そして、からからと呵々大笑。
天皇「君は飛行機を操縦できるのか?」
大様「私もまた航空自衛隊の出身でございます」
総理「飛行機が飛んだとしよう。しかし、上空を真っ黒に覆っている中国の飛行隊をどうやって突き破る…」
長官「突き破ったとして、敵のレーダー網を避けてどうやって中国本土まで進入する……」
総理「進入したとして、単独でどうやって敵の司令部をつぶす?」

大様「すべて策がございます」
天皇「しかし、敵の爆撃で残っている飛行機は一機もない。何に乗っていくのだ?」
大様「帝国博物館に太平洋戦争当時使用していた神風戦闘機が残っているではありませんか。ガソリンさえ満タンにしてくれましたら、どこであろうと飛んで行けないはずはありません」
天皇「おおおおお! 大様! 大日本国がここで事切れようとも、そなたの忠節は歴史に長く残るだろう。行くのだ、大様!」
こうして、大様奉昌は一九四一年型飛行機に乗り、帝国博物館の前庭から離陸した。彼が中国の飛行隊から制止もされず、攻撃も受けなかったのは、離陸するとすぐに機首を回して太平洋に向かったためなのだが……
「祖国日本がこのような状況になったのは、あのアメリカ野郎たちが道義もなく日米同盟を破棄したからだ。敵を叩くのは次だ。道義を破った代価がどんなものか、みせてやる! 天皇陛下万歳!」
寿司王・大様は太平洋を飛行機で渡ったが、ニューヨーク上空に到達できぬまま墜落し、あえなく自由の女神にぶつかった。女神像が音を立てて崩れたのが、大様の飛行機がぶつかった衝撃のせいなのか、たまたま突進してきた直径一メートルの彗星によるディープ・インパクトのせいなのか、それは定かではないが、これは二〇〇一年九月十一日、ワールドトレードセンター・ツインタワーが崩れてからちょうど三十年目のことだった。

一九三二年四月。
中国・上海のフランス租界のある食堂。
白凡が古びたトランクを手にし、全員が集まった中、王社長が新聞を振り回しながら飛び込んでくる。

王社長 先生、金(チン)先生!
白凡 ああ、どうなった?
王社長 成功だ、大成功!(読む)「虹口公園で爆弾義挙!
虹口公園、日本人の慶祝会の壇上で大量の爆弾が爆発し、日本の派遣軍司令官・白川大将と居留民団長・河端が即死、重光大使、植田中将、野村中将、村井総領事などが重症を負ったほか、壇下にいた日本の軍官民【註4】多数が負傷した……」。
白凡 尹君! 尹奉吉君!

白凡が尹奉吉の名を呼びながらすすり泣き、しばらくして顔を上げて愛国歌を歌い始める。

白凡 東海が乾き果て、白頭山が磨り減る時まで、神の護り給う我が国万歳。むくげの花三千里……(間)いや、違う……違う……

歌をやめる。

白凡と周囲の人々が顔を見合わせる。

安益泰先生が「韓国幻想曲」を作曲したのは一九三六年頃。それ以前、国家はスコットランド民謡「オールド・ラング・サイン」に合わせて歌われていたという。

白凡　こうしている場合じゃない。いつ奴らが押し寄せてくるかわからんからな……皆さん、ありがとう。平和の時代が到来したら、また集まって高粱酒を一杯やりましょう。

白凡はトランクを抱え、逃げ出す準備をする。

白凡はアメリカ人ジョージ・フィッチの家に一時身を隠し、日本の警察の捜索から逃れる。その後、白凡の臨時政府は杭州に移った後、一九三四年に南京、一九三七年に漢口、一九三八年に長沙、そして廣州、貴陽の施設を転々とし、中国南西の果て重慶まで移っていった。この長くも長い逃走の間、白凡は母親と長男の仁（イン）を失い、祖国が光復を迎えるまで十三年の歳月を待たねばならなかった。

【註1】　戯曲集8ページ下段5行目

日本では、漢文の訓読は日本語と語順が違う漢文を、漢文の原型を変えずに符号を付けて、日本語の語順となるように翻訳して読みますが、韓国では、漢字の読みだけ読み、区切りがいいところで切り、補助的に意味に適した接続語か語尾を入れます。しかし、原本では漢字の読みだけを韓国語で表記しています。

【註2】

※1　戯曲集10頁上段15行目

張小姐　いらっしゃい！あ、金（チン）さん！

白凡　こんにちは、ミス張。

張小姐　ようこそいらっしゃいました。

白凡　炸醤麺とハサミをくれ。

張小姐　ハサミ？　何を切るの？

白凡　何を切る？　麺を切るんだ。

張小姐　わかった、わかったわ。

※2　戯曲集14ページ下段14行目

王社長　いらっしゃい！　金（チン）さん！

白凡　こんにちは、王社長。

張小姐　どうぞ、金（チン）さん。

李奉昌　こんにちは、小姐。

白凡　炸醤麺とハサミをくれ。

張小姐　わかったわ。

※3　戯曲集21ページ上段4行目

王社長　いらっしゃい！　金（チン）さん！

白凡　こんにちは、王社長。

原本では、中国語の台詞を発音そのまま韓国語表記しています。作家と相談し、それを日本語に翻訳しましたが、当時の上海そしてフランス租界の多言語性と、この戯曲のもつ劇構造上の遊戯性とフィクション性をそのまま日本語にしてしまっては、十分に伝えられないのではという議論を経て、中国語をカタカナ表記に修正しました。これ以降の王社長、張小姐の台詞は、原本でも韓国語で書かれているため、そのまま日本語にしています。

また、人名においても中国語読みで韓国語表記されている部分があります。金先生は韓国語では「キム先生」、李さんは「イさん」となりますが、原本で「チン先生」、「リーさん」となっているため、翻訳においても中国語読みとしています。

【註3】　戯曲集37ページ上段7行目

原本では、漢字の韓国語読みそのまま「テバンボンチャン（大方奉昌）」のあとに「オオサマブショオ」と表記されています。作家はオオサマブショウに漢字を当てたということですが、「方」を「サマ」とは読めないため、「サマ」に当たるいくつかの漢字を提示し、「大様奉昌」としました。ただし、この大様＝オオサマという苗字には、オーサマ、オサマ、オサマ・ビンラディンの名が隠されています。

【註4】　戯曲集39ページ上段19行目

原本では、「日本の軍官民が多数負傷した」と書かれていますが、分かりやすさを優先させ、「多数の日本の軍人、官人、民間人が負傷した」としました。しかし、上海天長節爆弾事件についてはいくつかの資料があり、慎重に翻訳をすべき点でした。「多数の日本人の」とした時、軍人、官人、民間人それぞれに多く負傷者が出たというイメージを読む人に与えるのは、この上海天長節爆弾事件の被害事実と歴史的視点さえも誤って伝える可能性があるとのご指摘を受け、原本のとおりに修正しました。

朴祥鉉作「刺客列伝 Terrorists」の翻訳に誤訳がありましたことを、訳者として深くお詫び申し上げます。

翻訳台本を修正するにあたり、リーディング公演を演出した演出家の川口典成さん、出演者の広田豹さんから稽古場での戯曲・翻訳に関する議論をお聞きし、ご助言をいただき、誤訳を修正するとともに、戯曲の構造を明確にするための修正、誤字・脱字・文章の修正も合わせておこないました。

本来であれば、戯曲集が完成する前に、リーディング公演が行われる前に、稽古現場で戯曲に真摯に向き合っていらっしゃる演出家、俳優の方々と、訳者が戯曲の完成度を確保するためにも、意思疎通を図るべきだったと思っております。後手になってしまいましたが、川口典成さん、広田豹さんのご協力でこうして修正版を完成させることができ、感謝いたします。

（訳者／木村典子）

【誤訳の正誤表】

頁	段	行	誤	正
7	上	3	吳成崙（オ・ソンリュン）	吳成崙（オ・ソンニュン）
8	上	2	凌駕	制圧
33	下	13		
9	上	1	君が私であり、私が私の心であると言ってみろ	君が私で、私が私の心だとしてみよう
9	上	18	出端をくじかねばならん	機先を制さねばならん
10	上	9	女爲設己者容	女爲悦己者容
26	下	3		
10	上	10	己を説ぶ者のために容る	己を悦ぶ者のために容る
17	下	8	（8行目～16行目）樊於期	荊軻
18	上	20	金祉燮	金益相
20	下	5	執行官アル・ムスタルシド	宰相アル・マズダガーニ
20	下	19	インシャラ！	インシャー・アッラー！
22	下	15	使用人男性	西洋人男性
23	下	1	カーネーギー	カーネギー
30	上	20	東京に発つ前に	東京に着くまでに
33	下	3	（3行目と5行目）金先生	李さん
34	上	13	虹口空港	虹口公園
39	上	15		
34	下	9	まず羽を撃って落とすもしかり	まず飛ばせてから撃ち落とすもしかり
38	上	16	願以此功徳	お願いがございます
39	上	19	会場	壇下

韓国現代戯曲集Ⅸ
「刺客列伝」

2019年1月23日発行
2019年7月8日改版